

1937年に盧溝橋事件を起こした大日本帝国の皇軍が中国への全面的侵略戦争を始めてから 80年の年月が流れました。1987年に中国から日本に留学してきた斑忠義氏(1958-)は、中国人戦争被害者の体験を記録し続けるなかで、「慰安婦」と呼ばれた女性の存在を知り、取材を始めたのが、1995年でした。取材を受けた



すべての女性たちは、「目を見開き、手は震え、避ける」身構えを見せ、容易な状況ではなかったため、斑氏は丁寧に時間をかけて取材しようと決め、18年の歳月を要して、80余名を訪ね、このドキュメンタリー映画「太陽がほしい」を完成させました。戦争被害者がいまだに捨て置かれ、謝罪も賠償も受けていない現実が

あること、あの戦争はいまだ解決されていないと実感しました。今も、韓国、フィリピン、アメリカの各都市に、抗議の印である「慰安婦」とされた少女像が設立され続けていることから明白です。

映画の舞台は、山西省孟県の農村地域と湖北省武漢の都市部でした。皇軍は進攻すると同時に、無力で、無用と思える老人、乳幼児をすぐに殺し、怪しいと見なせばどんな人でも捕らえて、問答無用に殺し、若い女性は「慰安婦」として利用し、非人道的な、残虐非道としか言えない状況が展開しました。戦争であっても、ジュネーブ条約などを無視した、理性も倫理も失った狂気に、中国の人々は蹂躪されました。この体験を生き延び、証言してくれる人々も高齢者となってしまいましたが、軍隊の利用した場所が廃墟になって残っていて、無残な姿をとどめ、その証言には嘘はありません。この映画では「性暴力」の実態を明らかにしようとしています。あまりにむごい暴力に、日本人であることが、辛く、恥ずかしい、と胸が痛くなりました。

「慰安婦」とされた女性たちも、無残な姿のまま、隠れるように生きていたのです。女性は、当時13歳くらいの若い少女達から、女であれば、人妻でも寡婦でも有無を言わず、強姦し、拘束し「慰安婦」とされたといひます。彼女たちは洞窟や、慰安所に拘束され、一日に30人~40人の、列をなして順番を待っている皇軍の兵隊の「慰安」物とさせられました。その折に拷問を受け、乱暴された傷にいまだに苦しんでいても、彼女たちは日本の皇軍に協力したと誤解され、精神的にも打撃を受け、孤独に、貧しく生活していました。

駐屯地の真っ暗なヤオトン(土の中の家)に監禁され、用をたすときだけ外に出られました。食べていないので何も出ないが、外に出たいのでトイレに行って背をのぼす。太陽の光がほしかった。(劉 面換さん(写真) 山西省)

「慰安所」では生理のときも休めませんでした。妊娠した時は「紅花」という薬を飲まされました。そのあとお腹からどろどろの血が流れます。すると、体から力が抜けて、顔が黄色く痩せます。そんなことがあって、私は子どもを生めない体になってしまいました。(袁 竹林さん 湖北省)

彼女たちの戦争体験は「恐怖の情景と瞬間であり、断片的なものが繰り返されるだけだった」とそのトラウマのフラッシュバックに斑氏はきっと、はらわたが引きちぎられる思いになったでしょう。「慰安婦」という仕事についてのではない、暴力で犯されたのだ、この屈辱と、悲惨な人生に対し、日本の戦争責任者は謝罪してほしい、死んでも鬼になって、それを訴え続けたいと死の床で話す万愛花さん(山西省)になんとお詫びをしたらよいのでしょうか。このドキュメンタリーに加害者であった数人の旧皇軍の兵隊だった人も顔を出し、名乗り、証言しています。自らの罪を告白し、彼女たちが味わった苦しみは二度とあってはならないという慚愧の告白でしょう。けれども、当事者たちは死んでいきました。貧困、病気、偏見、孤独のまま、捨て置かれたままに。私たち日本人は、この戦争は過去のものである、戦争という事態ではあり得ることである、政治決着で処理すべきことである、と無視、不問でいられるでしょうか。彼女たちの証言を受け止め、赦しを乞い、記憶にとどめるべきです。